福岡・魚屋町遺跡

1　所在地　福岡県久留米市城南町
2　調査期間　第一次調査　一九九六年（平8）二月～六月
3　発掘機関　久留米市教育委員会
4　調査担当者　水原道範
5　遺跡の種類　城下町跡
6　遺跡の年代　江戸時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

魚屋町遺跡は久留米市街地の中心部に位置する。調査地周辺は台地と低地が複雑に入り組む地形を呈するが、調査の進展により、元和七年（一六二一）久留米藩主となった有馬氏による城下町建設の際に、台地上を武家屋敷、低地を町屋に割り当てた状況が判明しつつある。

魚屋町遺跡は標高八m前後の低地に広がる町屋地区に所在するが、今回は城下町を南北に走行する魚屋町筋、および東西に走行する築島町筋が直交する地点の北西部分を調査した。この場所は、正保三年（一六四六）の年号が記された護摩札など、一二点の木簡が出土した呉服町遺跡（本誌第一八号）の約五〇m西側にあたる。

調査の結果、南北溝一条、土坑二七基、井戸五基、溝状遺構一条、礎石建物四棟などの遺構を検出、特に魚屋町と築島町の境界である南北溝が検出されたことにより、呉服町遺跡の調査成果と合わせて魚屋町は五五mの東西幅を有することが判明した。

出土遺物には、肥前系陶磁器・高取系陶器を中心に、一八世紀前半代の十数年間のみ藩内で焼かれた朝妻焼の陶磁器、明・清染付など中国製品やイギリスのドーソン窯製品などの輸入陶磁器、土師器、瓦類、銭貨、鉄・銅製品、木製品などがある。

木簡は南北溝の西側、旧築島町部分を調査したトレンチの下層において検出された廃棄土坑SK一〇七より五点、廃棄土坑SK一〇八より一点、溝状遺構SX九二より一点、計七点が出土した。

SK一〇七は、長軸三・三m、短軸一・一m、深さ三〇～六〇cmを測り、平面形は楕円形を呈する土坑である。木簡の他には、宝永五年（一七〇八）初鋳で翌年には通用停止となった十文銭である宝永通宝、桶・下駄などの木製品、一八世紀前半代～同中葉頃の陶磁器が出土している。

SK一〇八は、東西二・二m以上、南北一・九m、深さ四〇cmを

測る不整形の土坑で、漆器や下駄・桶・折敷などの木製品、一七世紀前半代～同中葉頃の陶磁器が多量に出土した。

ＳＸ九二は、有馬氏入部以前に久留米を領していた田中氏の時代の城下町に関係する溝または堀と推定される遺構である。この溝状遺構と一連のものと考えられる遺構は調査地の東側に所在する呉服町・両替町遺跡においても確認されており、約一〇〇ｍ分の存在が知られている。有馬氏による城下町改編によってこの溝状遺構が埋め戻され、その上に積み土によって地上げがなされた際に、積み土の基礎部分として多量の板材が約五㎝の厚さで積まれていたが、木簡はその板材層中から出土した。

8　木簡の釈文・内容

ＳＫ一〇七

(1)
・「〇　□□五拾目　」　119×26×7　011
・「〇□〔寅カ〕七月廿二日
□両替町平右衛門」

(2)
・「〈〇井筒屋□□□〔右衛門カ〕」　123×37×7　032
・「〈〇□　□　」

(3)
・「〈くるめうおや町
新兵衛」　136×30×3　033
・「〈　□　」

(4)
・「〈　ち□　□」　115×14×5　033
・「〈□　□　」

(5)
「寛文十七□〔年カ〕（マヽ）二月十七日」　264×13×11　065

ＳＫ一〇八

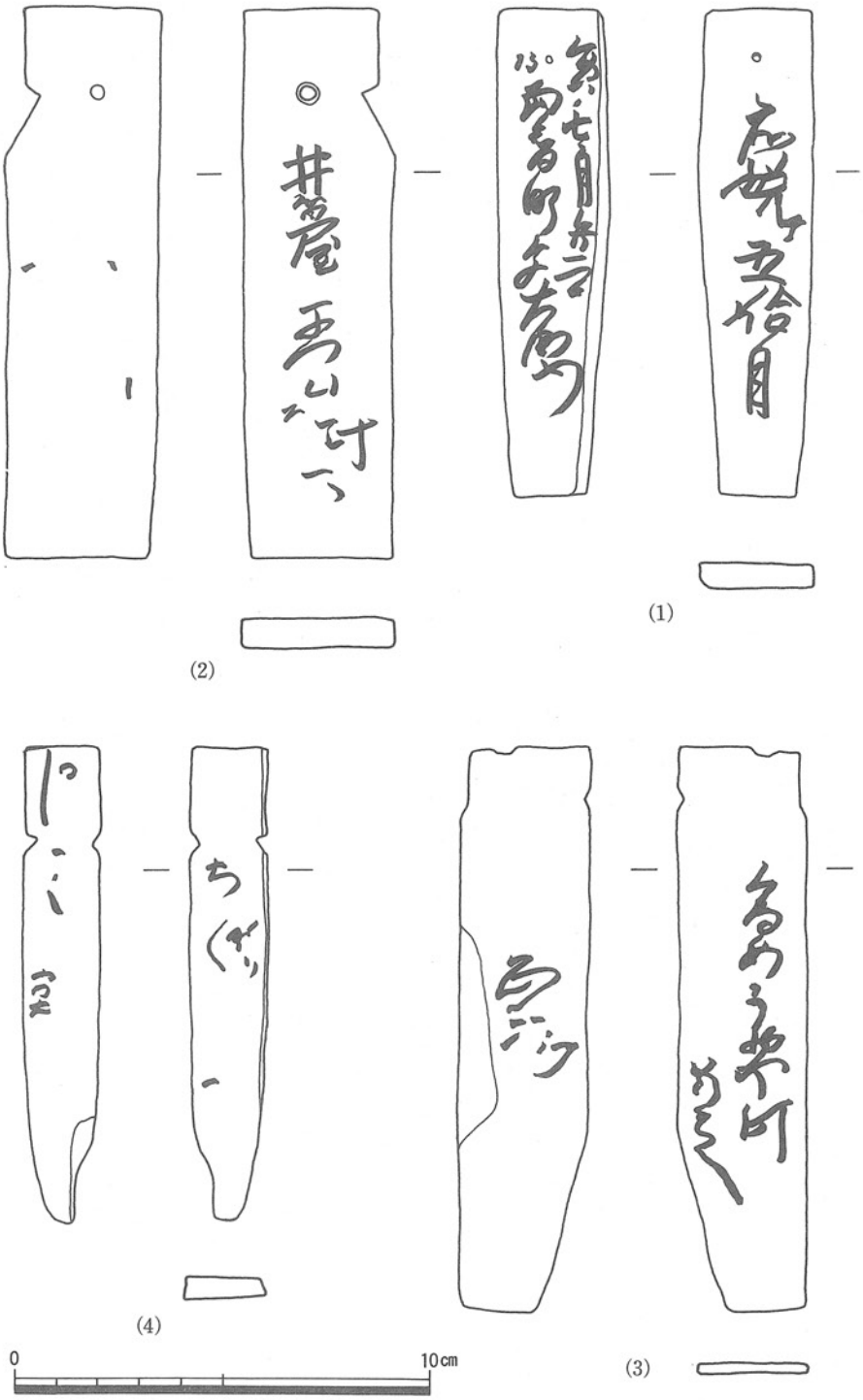
(6)
「寛永□□□□□〔弐拾年カ〕　七月廿六日長兵衛」　271×21×11　065

ＳＸ九二

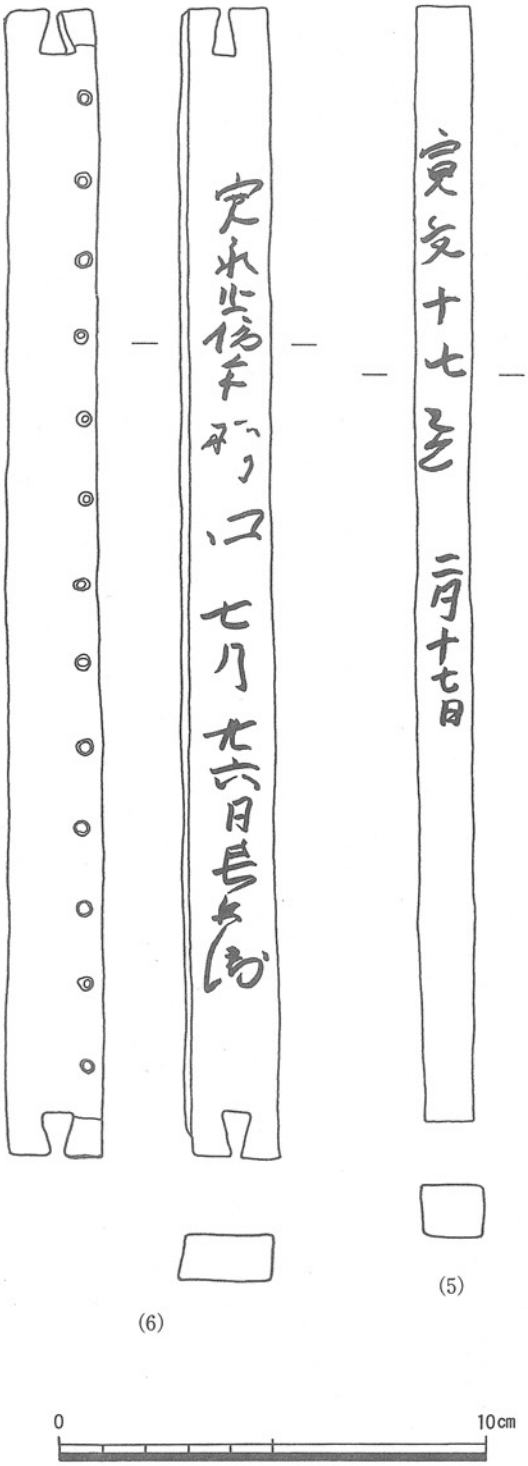
(7)
「□□」　101×16×2　011

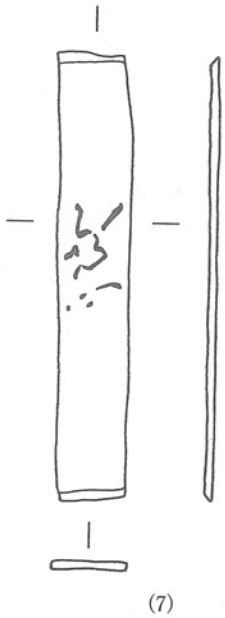
樹種鑑定を行なっていないため樹種は不明であるが、全て板目材が使用されている。

(1)は上部に穿孔がある。商品の付札と推定される木簡である。両替町は調査地の北側に隣接して所在する町人居住区である。(2)は上部に穿孔と切り込みがある。井筒屋が関係した商品の付札と推定されるが、裏面は墨痕が認められるのみで詳細は不明。井筒屋は両替町・呉服町などの町別当を勤めた有力町人である。(3)は上端左右に浅い切り込みをもつ。上端は切断のまま、また左側面下端は斜めに切断されている。ＳＫ一〇七の東方に隣接する魚屋町新兵衛からの送り状と考えられる。(4)は上端の両側面が切り込まれ、下端の一部は刃物で抉り取られている。両面ともに墨が薄れ肉眼では判断し難


(1)
(2)
(3)
(4)
0
10cm

いが、これも付札とみられる。(5)は角材の一面に年号・日付が記載されるのみの用途不明品である。(6)は上・下端に木口から切り込みをもち、裏面には深さ三㎜前後の浅い孔が一三カ所穿たれている。寛永の年号が記載されるが、中央部は重書され、文字は明確でなく、墨書がこの木製品に伴うものか否かは定かではない。(7)は上・下端とも切断のままで、片面のみ墨痕が認められるが、判読不能である。





9 関係文献

久留米市教育委員会『魚屋町遺跡第一・二次調査』(一九九七年)

(水原道範)